

北大は法学・政治学で 未来を築く

どのような社会にも法があり、人間と社会の活動は法によって支えられている。

一方で法は、あるべき社会を実現するために、人間によって作りだされる。

また法は、その社会の文化と歴史を背景に形成され、社会の変化によって変容しうる。

このように、法にはその社会の理想や現実が込められている。

北大は、そのような法と社会の関係を考究し、未来を築く人材を育て続けている。

座談会

● 今回の座談会では、四人の先生に、それぞれの研究や経験を踏まえて、現在の日本社会を診断していただき、日本社会の未来を築くという観点から自由に語っていただきます。まず、学生時代にどんなことに関心があったか、順にお聞きしたいと思います。



中島 岳志

Nakajima Takeshi

公共政策学連携研究部准教授



田村 善之

Tamura Yoshiyuki

法学研究科教授



宮本 太郎

Miyamoto Taroh

法学研究科教授



長谷川 晃

Hasegawa Koh

法学研究科教授

学生時代の関心

中島●一九九五年、僕は大阪で学生生活を過ごしていたのですが、一月に阪神大震災、三月に地下鉄サリン事件がありました。八月に村山談話問題などで、歴史認識やナショナリズムの問題が大きくなった。宗教とナショナリズムという実存に触れる問題が日本中で大きく沸騰しながら、単純化された議論がメディアで横行していた。戦後五〇年間日本は愛国と信仰に関する問題をどう考えてきたのかというのが当時出会った問題。この二つが大きくなった戦前の日本の右翼思想に関心をもった。また、同時代のインドでは宗教とナショナリズムが異常に大きく変わった時代がやってきた。

保守思想との出会いから、社会問題へのコミットメントへ

●では、まず中島先生に現在の関心と社会とのかかわりについてお聞きします。インドへのご関心から日本社会をどうご覧になっていますか。また、保守思想についてよく言及されますが、それほどのような意味をもつのでしょうか。中島●二〇歳のときに宗教とナショナリズムの問題に出会い、図書館にこもって大量の本を読みました。理性あるいは

現代日本における自分の問題を考えるために、時間軸をずらして戦前の日本を見て、空間軸をずらしてインドで起きていることを見る。それによって自分がどういう状況に生きているのかを逆照射させるのが、学生時代の一番の関心でした。

田村●大学一、二年のときは、英語劇に傾倒していました。演劇ではスクリプト(脚本)を読み込むだけでなく、演出家の作りたいもののためにスクリプトが活かされている。これは、法律の条文をスクリプトに見立てて解釈を構築するという法学方法論に近い。授業を受けながらそんなことを考えていて、自分でも何かできると思いました。学問の道に行くことに決めました。そして知的財産法の分野の助手になりました。

自分の能力への過信があり、書物を読んでもいけば世界を把握できると思っていました。

しかし合理的に物事を考えるほど理性の限界に出会わざるを得ない。世界全体を把握することは不可能だと認識せざるを得ない。

そのときに出会ったのが親鸞の悪人正機説。親鸞は自力の限界を説き、絶対

長谷川●高校のとき進路に迷って父親に相談したところ、「法学部はつぶしが利くから」と言われ、法学部を受けました。当時は哲学に興味をもち、我流で本を読んでノートを作っていました。二年のときに他学部編入試験があり、哲学科に行こうかとも思いましたが、法学部にも法哲学があつて自由に勉強できるということで、法学部にとどまりました。

法哲学のゼミはすごく面白かった。図書館に入りしていろんな本を読みましたが、四年のとき東京大学の碧海純一先生が書いた『法哲学概論』を読み、大きな知的衝撃を受けました。そこで碧海先生の勧める本をとにかく読みました。その後もっと勉強したいと思いい、東京大学大学院に進学しま

他力を考える。悪に自覚的になったとき、自分の能力を超える視点をもてる。また保守思想は合理主義の限界を説いて、人知を超えたものに依拠し、経験知や良識に基づいて社会を漸進的に変えていくという思想。理性への過信から来る革命思想には誤りがあるとする。パークや西部邁の著作を読んで納得しました。当時は仏教思想と保守思想が正しい

した。

宮本●高校では軽音楽部に入っていたのですが、難しい本も読んでいました。分かったふりをしないとカッコがつかないということで、使えそうな言葉を拾って議論していました。

大学でも軽音を続けながら、学生運動の真似事にもかかわっていました。世の中の秩序を全て変えろとか、全生活を犠牲にするとか、旧態依然たる学生運動のロジックには馴染めなくて、いろんなことを考え始めました。政治学のゼミで、普通の価値観に沿って生活をしながら、政治ともかわる条件を備えた国があることがわかり、考える道筋を探り当てたという感覚をもったのが、学部時代でした。

中島先生の代表作



中島先生の大佛次郎論壇賞受賞作『中村屋のボイス』(白水社)。インド独立運動家がいかに日本の戦前思想と出会ったか知ることが出来る。

と思ったのです。

すると図書館にこもっている自分を疑い始めるわけです。ここで物事を考えていること自体が、自分の思想から外れる。僕は観念的に物事を考えるのが好きであるがゆえに、フィールドに出ないといけないと思いました。いったん書を捨て社会に出ないといけないと考えて、大学院では文化人類学を選びました。フィールドで起きている現象自体から物事

を考えたいと思って、インドに行きました。ヒンドウのナシヨナリストたちと共同生活し、彼らは毎日何を食べ、どんな行為をして、どこから宗教とナシヨナリズムに引かれていくのかを地べたから考えたいと思った。今の自分を考えるためにインドに行き、彼らと共有できる問題を探りたいという思いがずっとあります。

● こうした先生の関心は社会的にどんな意味をもつとお考えですか。
中島 ● 僕は三五歳で、ロスジェネ世代。団塊ジュニアだから同年代が多いんです。高校を出た頃にバブルが崩壊し、大学を出た九七、八年頃は、就職氷河期。フリーターという労働環境の中で、これが自由だと思って生きてきたわけです。僕も大学院に進むことが自由な選択だと思ってきました。しかし厳しい生存の中に僕

たちは追いやられる。新しい歴史教科書を作る会とか、小林よしのりの『戦争論』とかがこの世代に受けるという現象が生じて、ナシヨナリズムが代的な問題とリンクしてくる。そう理解したとき、自分は思想的にどう戦ったらいのか考えました。こうして僕は、労働運動や反貧困に突っ込んでいき、いまソーシャル・インクルージョンの問題で商店街にもかかわるようになったのです。

知財を作っても世の中が栄えるわけではない

田村先生のゼミ風景



展望についてお話いただけますか。

田村 ● 知的財産とは情報や行為に関するあるパターンのこと。人が歌を歌ったり、発明をしたりする行為のある側面を知的創作物として権利化しているのです。経済的価値が高いので、国際的なロビイングのなかで、より権利が強化されるとい問題があります。

メールやFAXをするときに著作物を複製することがありますが、著作権法にはそれを自由とする条文がない。それを自由と主張する人も少なくなくて、アンタタッチャブルな領域なんです。実際の著作権法の条文は多くの人の理解とは違い、かなり権利者寄りに歪んでいる。

従来のは法学では、法は民主的なプロセスを経てできたものだからよいもの

だという前提があつて、それらが矛盾している場合、条文を解釈して対処する。でも知的財産権の場合、特許法や著作権法が歪んだものになって、それでは対処できない。権利や法の形成過程にメスを入れて議論しなければいけない。政治学・経済学・法学が相互作用的に役割分担をし、課題に取り組むべきだと私は考えています。

「知財立国」についても問題がある。知財を作っても世の中が栄えるわけではない。法や権利ではなく、中身の豊かさが大事。ではどうしたらいいかという、国内と国外で分かれてきます。

国内では特許と著作権で分かれる。特許だと、産業分野別に様々なイノベーション構造があるんですが、法は平等性を保つために、発明という言葉で一括して特許権を与えています。その

なかで、いかに産業分野ごとに特許を区別するのが課題。著作権については特許以上に生活にかかわる。皆が思っている著作権と著作権法が乖離している。これが国内での課題です。

大事なのは外国との関係。産業分野に関して、各国で知財レベルに大きな差がある。米国は二〇世紀半ばまでは英国文化を移入しやすくなるため、著作権を弱くしていた。日本は工業発展のため弱い知財制度ですつと来た。それが日本では一九九〇年頃に実現した知財の水準を条約を通じて国際水準として各国に押し付けようとしている。それで日本も米国も富の移転で栄えると思いますが、相手国の状態を悪化させる。それには大いに疑問をもつていて、日本の枠内で知財立国を考えるべきではない。各国の知財意識ごとに対応を変えることが課題です。

● 田村先生。情報社会における知的財産権の課題とその解決の手立てについてお聞きしたいと思います。また、日本は「知財立国」とも言われますが、今後の

抽象的な概念にもリアリティがある

●では、長谷川先生。日本の法制度に関して正義が十分に実現できない部分があるのかどうかという問題があると思います。

長谷川●正義論はすごく抽象的です。物事を交換するにしても、罰とか損害賠償を与えるにしても、財を分配するにしても、その基準について議論する。しかし抽象的な概念にもリアリティがあり、どこかで人間や社会を動かしていると思います。

最近の法哲学は、様々な事例を基に考察しているとはいえ、百家争鳴状態。

分配の正義にしても、いろんな立場の人が具体的なケースを念頭に置きながら様々な主張をしている。正義の立場によって、具体的な問題の扱い方が変わってくる。例えば市場原理主義的な考え方と、格差社会を是正する考え方は、市場メカニズムをどこまで許容すべきかに関して議論が分かれる。だから、自分なりにどういう正義の見方をとり、他の見方とどう関係させて議論するかが大事。特定の問題、例えば社会保障や貧困問題について考えると、それにフィットする正義論がある。

また、どの立場をとるかによって、法制度がどれくらい歪んでいるか、見え方が変わる。例えば、構造改革以降の新自由主義や市場原理主義に対するスタンスも、どういう正義の考え方をとるかで議論が変わってきます。自分の正義感覚を反省し、社会問題とのかかわりを考える態度は重要だと思います。いろんな正義論を考察しないと、法制度のどこがおかしいのか議論が十分でなくなる。法学部では、そういう目と感覚を磨いて広い視角から議論するのが大事だと思います。

あるべき生活保障とは？綱と綱から考える

宮本先生の関連図書



宮本先生の近著「生活保障―排除しない社会―」（岩波新書）、日本型生活保障の現状と「シモン」を他国の制度と比較しながら論じている。

●宮本先生。日本社会において貧困と格差が広がっているのはなぜでしょうか。それと社会保障と雇用の枠組みである「生活保障」の方向性とはどのようなものでしょうか。

宮本●「生活保障」は社会保障と雇用を包括する言葉。人が生活を続けるには、見返りのある仕事で働かなければならない。失業時に社会保障がセーフティーネットの役割を果たすことで、生活保障が成立するわけです。こうした構図はサーカスのテント

に例えられます。セーフティーネットとその上に張られている綱です。人生という綱を渡りきれればいいのですが、落ちたら大変なので下に綱を張る。その安全綱がセーフティーネット。日本は安定した社会で、経済も伸びた。綱がしっかりと張ってあり、滅多に人が落ちないくらい綱が太く、みんなが渡れる数の綱があった。だから綱の面積は狭く、年金だとか高齢者医療を中心に人生後半部分に重点的に張ってあった。

ところが九五年頃から様相が変わった。非正規化の流れで細い綱になった。

これまで正規の仕事をお父さんが担ったけれども、その稼ぎでは十分でないから、お母さんがそれを補完して働く。つまり太い綱を補強する細い非正規の綱。そして非正規の仕事で家計を支える人が増え、綱が細いから落ちてしまう。

また、綱が途切れるようになった。九九年に労働者派遣法が改正され、有期雇用も増大した。さらに綱の本数も足りなくなった。九五年頃から、仕事を外部委託する会社が増え、公共事業も減った。

ところが日本社会というテントは綱

長谷川先生の講義風景



が弱かったので、綱からドンドン落ちるのに綱が支えられなくて、テントの地面に激突してしまふ状況になっている。

では今後どうしていくか。一つはセーフティネットを強化すること。でもセーフティネットだけ強化しても、社会というテントは成立しない。とはいえ、男性しか綱を渡れなくて女性には細かい綱でそれを支えるかたちは変えるべき。

課題は、細くなり、途中で切れ、本数が足りなくなった綱を

コーティングすること。社会的手当で生活コストを下げるとか、給付付税額控除を行うのが一つ。また、公的職業訓練を受けて、次の仕事に就けるようなかたちで綱と綱をつなげる方法もある。

それから綱の数を増やすこと。化石燃料から脱却して、住宅や工場のエネルギー効率を高めるとか、リサイクル事業を増やすとか、再生可能エネルギーへの転換を増やす。こうしたグリーンジョブを増やすと、製造業

のコストも削減でき競争力も上がり、仕事も増える。またグリーンジョブはローテクで、中短期的な訓練で就業できる。綱の弾力性を高めて、トランポリン化することも大事。

綱をきちんと張り替えると同じ時に、雇用という綱だけでない、多様な人生のステージを地域社会で築いていく。NPOとか、ボランティア、子育てを含めて、それらを綱として認定することで、日本社会というテントを甦らせることが大切です。

異分野同士が自由に議論できる環境

●それでは最後に、若い人が北大法学部で学ぶ魅力について、お願いします。

中島●政治には何が不可能なのかという問題から考えるのが、僕の問題です。雇用問題の一部である派遣労働に関する問題や、そこに続く孤立、疎外などから派生する事件の解決策として挙げられるのが、セーフティネットを整えること。さらに社会の中で実存の場所を作るソーシャル・インクルージョンも必要。だがこれだけでは不十分。

引きこもっている人や派遣労働者の多くはそんな所に出てこない。そのような人に届くのは文学や宗教かもしれない。

僕はこの領域に政治がどう関与するかに関心があるんです。これを越境すると、ファシズムとかナショナリズムが出てくる。実存の不安を覚えた人間がそこにアプローチするときに出てくる問題も同じ。それは戦前のファシズム期にあったし、現代インドにあるし、現代日本にもあるかもしれない。

北大では、貧困問題とか格差問題、社会問題を様々なアプローチで探究できます。制度設計もソーシャル・インクルージョンも重要だし、リベラル・コミュニタリアン論争のような価値問題も重要。政治とそうでない部分のかかわりがどういう悲劇を生み出すのかもトータルで見ないといけない。それを全体として研究できるのが、北大の魅力だと思います。

田村●北大法学部はかなり自由。相対的にはまだ忙しくないからかもしれないけれども、自由闊達に研究している方が多

道徳感情論

(上)

アダム・スミス著/水田 洋訳



白105-6
岩波文庫

宮本 太郎

アダム・スミス(水田 洋訳)

『道徳感情論』(岩波文庫)

市場原理がいかなる人々の間の暗黙のルールに支えられているか、あるいは支えられるべきかを論じる。こう書くとむずかしそうだが、どんな時に友達の「同情」を期待できるか、逆に人のために尽力するべき時はいつかなど、「空気」をいかに読むかという指南書です。これは役にたつと感じるか、いささか空しくなるか。いずれにせよ古典を身近に感じる本。

長谷川 晃

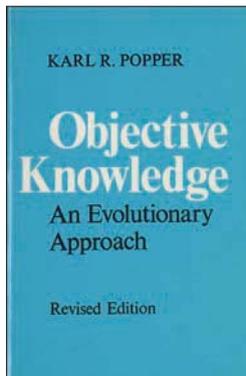
Karl Popper,

Objective Knowledge

(Oxford University Press)

(カール・ポパー、森 博訳、『客観的知識—進化論的アプローチ』、木鐸社)

学生時代、原書で読みました(翻訳よりも原書の方がわかりやすい)。20世紀を代表する科学哲学者の一人である著者の独創的な主張にはまさに「眼から鱗が落ちる」経験をし、哲学的問題の探求への姿勢にも大きな感銘を受けました。



い。研究会にかなり人が集まる。その余裕は教育にも活かされている。法曹向けの実践教育が得意な人もいるし、そこから身を置きゆつくり考えている人たちもいる。日本の中でもかなりバラエティのある大学です。すよね。こういうところで勉強するのは良い機会になると思います。

長谷川 ● 法哲学は、法学があまり実務志向になるときに、基礎の問題があるでしょうと言う。政治学があまり生々しいところに入つて行こうとすると、原理の問題があるでしょうと言う。こうしたことを研究会などで議論し合える場面が多いのが、北大の魅力だと思います。

特定の法律の条文解釈でなく、その立法過程も含めて全体を見て、いろいろな角度から問題を考えていくのが大事。法の社会的帰結や政治的帰結、法が作られた道徳的な意義などを明らかにしていく力をこの法学部は十分もっています。法哲学とか知的財産法とか政治学とか比較政治を分けて考えず、共通する問題を考えていくと面白い。

宮本 ● いま日本社会のキャリ

ア形成、人生設計のあり方が変化している。大学に入つて就職すれば安泰という時代ではない。

これまでの人生設計の真ん中には会社があつた。社縁・血縁・地縁という言葉がありますが、日本は社縁が中心で、お父さんは帰宅時間が遅く、血縁のコミニティである家族を犠牲にしていた。また休日になると疲れ果てて寝ているから、地域社会との連携も緩み、地縁も緩む。最近社縁も崩壊して、無縁社会になつている。新たに縁を作ろう、居場所を見つけようとしたときに出てくる障害を取っ払うことも大事。

勉強し直して別の居場所を見つかるための支援は、法や政治行政ができる。今そういう支えがないと、若い人が直面する不安を解消できない。また、そうした人々が居場所を見つけられなくなり、無縁社会化が進み、キャリア設計が難くなる。

北大法学部は、選択の幅を広げ、自分の責任と決断で人生の舵を切れるような社会に近づけていく土台作りを支援できると思います。歴史や思想を学び、制度設計を考え、そうしたグラン

ドデザインについて議論できる場で、皆さんが直面する問題を持ち寄り、ここで考えてみませんか。

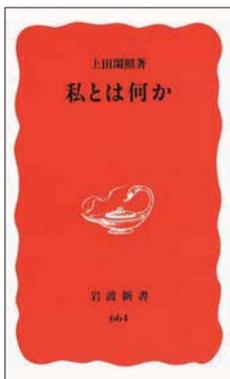
● 皆さん、本日はお忙しいところ、ありがとうございます。



司会・進行
理事・副学長

Henni Masaki
逸見 勝亮

学生時代に影響を受けた本



中島 岳志
上田 閑照
『私とは何か』(岩波新書)

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」と言いました。しかし、著者は「我無し、ゆえに我あり」と説いています。〈私なんていないから、私はいる〉ってどうのことでしょう? そもそも存在するって、どういうこと? そんな「私という存在」をめぐる東洋哲学の真髄を、わかりやすい言葉で説いています。



田村 善之
竹宮 恵子
『ファラオの墓』(スクウェア・エニックス)

滅びた国の王族として生まれ、国の再興を実現するためのリーダーシップをとることを周囲から期待されているという運命を受け入れ、艱難辛苦のなかでその実現のために身を捧げる主人公の姿勢が印象的な漫画です。このように生きることができたらと憧れて今にいたっています。